

編集後記

近頃用あつて、夜おそく体育館の横の通用門を入ろうとすると、カギがかかつていて、おどろいたことがある。

数年前の愛大は、どこからでも自由に入れたものだ。それが、あつというまに東側と南側にサクがつくられ、夜、東側から学内に入るには、せいぜいこの通用門を利用するしかなかったのだが、その通用門までがカギをかけられていたのである。

道路拡張の「おかげ」で、北側にも立派なサクと門がつくられた。この門は今のところ夜でもあいているようだが、これもいつしめられるようになるともかぎらない。学生たちの予感が現実にならないことを祈りたい。

愛大の近所に住む床屋さんが、こんな話をしてくれた。息子さんが、今年めでたく愛大に入学したので、大学祭に息子さんたちがやっている模擬店をのぞきにいったが、愛大の中に入ったのは、これが生まれてはじめてだという。大学というところは、一般市民にとっては、どうも近寄りがたい場所のようだ。

愛大もサクがなかったころは、人々はもつと学内を自由に闊歩したものだ。ベビーカーをおすお母さんの姿も珍しくはなかった。

今、「開かれた大学」ということが叫ばれている。公開講座、社会人入学は、たしかにけっこうなことだ。しかし、その一方で、われわれは、物理的、空間的に大学を閉ざしていつている事実がつかなければならぬ。「開かれた大学」というのは、なによりもまず、空間的に外に向かってひらかれていることなのだから。

(K・Y生)

昭和六十二年十二月二十日 印刷
昭和六十二年十二月二十五日 発行

(非売品)

編者 愛知大学文学會
代表者 湯本和男

印刷所 豊橋市東森岡
有限会社 三愛企画

発行所 豊橋市町畑町
愛知大学文学會
振替 名古屋三十四五六五四